

主体的に学ぶ生活科の学習における ICT 活用 ～他教科へのつながりを大事にして～

東根市立東根中部小学校 中山 雄 介

<研究の概要>

本研究では、生活科の学習において、児童の主体的な学びにつなげるための ICT の効果的な活用について考察した。導入の場面で、前時の板書をテレビに映し出して、児童の思いを引き出したり、交流の場面で、写真を見ながら話し合わせたりすることで、主体的な学びにつながるか検証した。その結果、前時の板書を映し出しながら児童の思いを確認することで、前時までの思いと現在の状況がつながり、本時に何をしたいのか、何をしなければいけないのかが明確になり、主体的に学ぶことができた。さらに、児童がタブレットを操作し、見せたい写真を見せながら話し合うことで、話し合いが活発になったり、話し合いの論点が焦点化されたりした。前時までの児童の思いを引き出すことや話し合いを活性化させるためにタブレットを活用することは、主体的な学びにつなげる手立てとして有効であった。

1 研究テーマ

昨年度は、6年生の国語と算数の授業での ICT 活用の実践を行った。ネットの番組を使用や、交流場面での ICT 活用により、児童の意欲を高めたり、交流を活発にしたりすることができ、主体的に学ぶ姿につながった。

今年度の学級の児童は、2年生ということもあり、これまで授業の中で ICT を活用する機会が少なかった。そこで、まずは教師がタブレットを画面カメラとして使用し、提示する場面を何度か設定した。すると、黒板を見る時以上に真剣にデジタルテレビを見る児童の姿があった。また、個別の配慮が必要な児童にとっても、視覚的に捉えることにより、学習に対して意欲的に取り組むことができた。これまで ICT に触れることが少なかったこともあり、ほとんどの児童が実際に ICT を使用したいと感じていた。

今回 A 児として設定した児童は、普段からどの教科でもまじめに取り組んでいるが、受動的な態度が多く見られた。A 児は教師の言われたことをそのまま取り入れてしまったり、友達の考えに流されてしまったりするという実態があった。ICT を取り入れることにより、A 児が、自分の思いや考えを明確にし、交流の中で自信をもって、思いや考えを表現させながら学習に取り組む姿を引き出したいと考えた。

そこで、今回は、低学年における ICT の活用の効果性を生活科の授業で検証し、主体的な学びにつながるようにしたいと考え、本テーマを設定した。

2 仮説

(1) 導入場面で、前時の板書をデジタルテレビに映し出し、前時までの思いを想起させることで、意欲が高まるだろう。さらに、展開場面で、児童が書いたものをデジタルテレビに映し出し、考えや思いを共有させることで、主体的な学びに向かうだろうと考えた。

(2) 自分たちで撮った写真を用いて話し合ったり、説明したりすることで、視覚的に捉えることができ、考えの共有化を図ることができると考えた。

3 研究の方法と計画

(1) 仮説 1 について

授業の導入場面において、タブレットで撮影しておいた前時の板書をデジタルテレビに映し出す。板書を拡大提示しながら、自分たちがどんな思いをもって活動していたかを思い起こすようにする。自分たちの思いを想起させることで、前時までの思いやこれま

で学んだことが現在の状況とつながり、本時に何をすればよいのか、何をしたいのかを明確にして活動に取り組むことができるだろうと考える。

展開場面では、活動の流れや児童の作品をデジタルテレビに映し出し、活動の内容の共有化を図ることで、児童の考えが広がり、創意工夫が見られるだろうと考える。

(2) 仮説2について

交流場面において、班での話し合いに写真を用いる。自分たちで準備した写真を用いて話し合わせることで、撮影した時の状況や思いをより鮮明に思い出し、具体的な話し合いになるだろう。さらに、視覚的な情報をもとにしながらかし合うことで、論点が焦点化された話し合いになると考える。

全体の交流では、写真を提示することで、児童同士の考えや思いのズレが軽減され、全体で共有しやすくすることができるだろう。

4 研究の実践

(1) 実践1

①実践の概要

ア 単元名

2年生活科「わたしの町はっけん」

目標

友達と話し合いながら、町探検で見つけたお店のすてきなところについてまとめることができる。

お店のすてきなところを話し合うことで、お店のよさやお店の人の思いに気付くことができる。

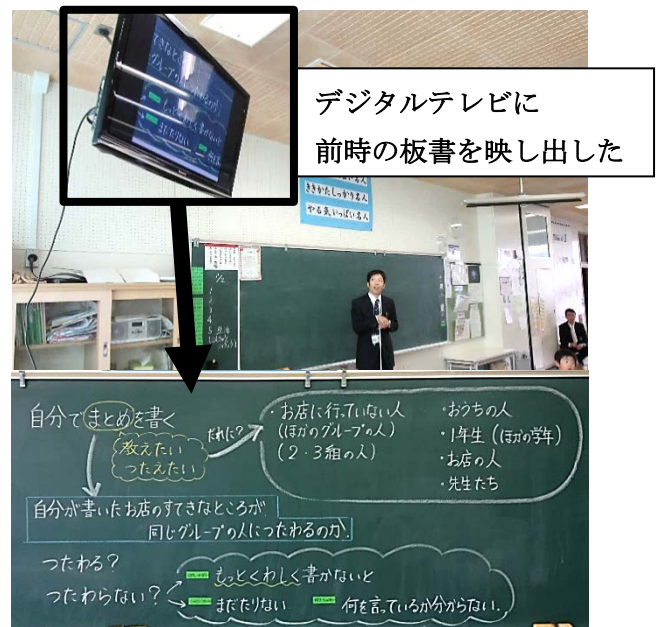
イ ICTの活用について

導入場面で、前時までの児童の思いを確認するために前時の板書をデジタルテレビに映し出す。大事なところを拡大しながら提示する。

交流場面では、グループごとにお店のすてきなところについてタブレットで撮ってきた写真を活用して話し合う。

②子供の学びの姿

導入場面で、前時の板書を映し出し、自分たちの思いを想起させることで、A児に限らず、多くの児童が、前時までの思いや学びと現在の状況がつながり、本時に何をすればよいのかが明確になった。自分たちの思いで活動できることと何をするのが明確になったことにより、意欲が高まり、展開場面での話し合いが活発になった。A児は、前時の活動で、自分のまとめ方では伝えたいことが伝わらないと感じ、伝える内容を友達と話し合いたいという思いをもっていた。前時の板書を見たことにより、A児の本時のめあてが明確になり、積極的に友達と話し合う姿につながった。



さらに交流場面では、地域のお店に行き、自分たちで撮ってきた写真を班で見ながら、伝えたいことをまとめていくようにした。写真を見ることで、当時の状況を思い出すことができ、話し合いが活発になった。A児も、自分がまとめたいことを積極的に伝えたり、友達と一緒に考えたりしながら、どんなことを発表するかまとめる姿が見られた。



(2) 実践2

①実践の概要

ア 単元名

2年生活科 「はっけんくふうおもちゃ作り」

目標

おもちゃ作りの楽しさや自分や友達の工夫・がんばりなどに気付くことができる。

イ ICTの活用について

製作段階から、自分が作っているおもちゃの工夫点を写真に撮り、友達に紹介する。

②子供の学びの姿

作ったおもちゃをタブレットで撮った写真で見せて友達と交流することで、どうやって作るのか、どのように遊ぶのかなど、より具体的に説明することができた。説明がなくても、見ただけで真似をして作ることもできた。友達のおもちゃに興味を示し、自然に一緒に作ろうとする姿につながった。さらに、みんなのおもちゃで遊びたいという意欲を高めることにもつながった。



制作時は、タブレットで写真を撮りながら制作した。



タブレットを使いながら友達と交流し、協力しながらおもちゃ作りに挑戦した。

(3) 実践3

①実践の概要

ア 単元名

2年生生活科「自分はっけん」

目標

自分を支えてくれた人々の成長を願う思いに気付くことができる。

イ ICTの活用について

自分の成長をまとめながら、感じたことを発表する。その際に、タブレットのカメラ機能を使い、デジタルテレビに写真を映し出しながら説明する。

②子供の学びの姿

生まれた頃の写真をデジタルテレビに映ししながら、親の思いを話し、自分が感じたことを発表した。写真を見ながら話を聞くことで、発表している児童の思いに共感することができた。A児は、自分で伝えたいことを考え、赤ちゃんの頃の写真を見せながら、生まれたころはとても小さくて両親が心配していたことや自分の名前の由来について話すことができた。



テレビに写真を映し出して、自分が生まれた時の親の思いや写真を見て自分の成長の気づきをまとめ、発表した。

5 結果と考察

(1) 仮説1について

○ 導入場面で、前時の板書をデジタルテレビで提示することで、話し合いが活発に行われた。

自分たちの思いが想起され、前時までの思いや学びと現在の状況につながり、本時に何をすればよいかの明確になった。それにより、自分の考えをもって話し合うことができたためであると考えられる。

- 展開場面で、児童の作品を提示し、ポイントの共有化を図ることで、ポイントが明確になり、児童の考えが広がった。

考える視点がはっきりし、新たな気付きが生まれたり、もっとこうしたいという思いが引き出されたりしたためであると考ええる。

- タブレットなどを使用する内容を考えていくと、児童の思考過程や見通しを推測することにつながり、児童の思考をつなげた単元計画を立てることができた。

これらのことから、生活科に限らず、他教科でも板書を映し出したり、前時の問題の確認を行ったりと、活動の流れやポイントをおさえる時に、タブレットを活用することで、児童が自ら考え、活動しようとする姿につながると考えられる。

(2) 仮説2について

- タブレットを活用し、自分たちで写真を撮り、それを見ながら話し合うことで、論点が整理された話し合いを行うことができた。

写真を撮った時の状況を思い出すことができたり、話を聞く側も視覚的に捉えることができたりしたためであると考ええる。

- 生活科では、写真を撮ってそれを見ながら話し合うことで、内容の吟味や活性化につながった。

視覚的な情報により、考えが共有され、本当に必要なのか、もっと工夫することがないのかを話し合うことができたためであると考ええる。

- ▲ 2年生にとって、写真が多いと写真を見るだけの活動になってしまう。そのため、事前に写真などの情報を精選しておく必要がある。

これらのことから、自分たちで撮った写真を話し合いに活用したり、発表の時に使用したりすることで、話し合いが具体的なものに

なったり、思いや考えが共有されたりする。

(3) 研究を終えての提言

- ・ 2年生でも、タブレットなどを使って、写真を撮ってそれをもとに話したり、説明したりする活動を仕組むことで、児童の思考が活性化し、自ら考えて活動する姿につながる。
- ・ ICT機器の発展により、小さい時から機材に親しむようになっていく中、学校でも系統性を考えてICTを活用した授業作りが求められている。各教科単元の特性を捉えながらも、下記のような学年に応じた取り組みを考えた。

【タブレットで写真を撮る場面において】

小学1年生→タブレットなどを使って、写真を撮ることができる。

2年生→撮った写真を見ながら、話し合うことができる。

3年生→撮った写真から必要なものを選び、話し合うことができる。

4年生→必要な写真を選び、話し合い、発表に使用することができる。

5・6年生→写真などの資料の精選を自分で行い、写真と言葉を組み合わせて提示しながら、発表を行うことができる。

中学生→ねらいに合わせて、撮る場所や撮る対象物を考えて撮ることができる。さらに、写真やグラフなど視覚的な情報を用いて、発表・プレゼンテーションを行うことができる。

ICTの進歩により、どの学年でもICT活用が考えられる。ICT活用については、本研究だけではなく、様々なところで、その有効性が分かっているため、系統的な指導を積み重ねることが大事となる。このような系統性のもとに、視聴覚主任が中心となり、教師の教材づくりに関わりながら、その有効性を広げ、効果的に活用できるようにし、児童の学習意欲を高めたり、学びの深化へと導いたりしたいものである。